

県道多度津丸亀線建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

中 東 遺 跡

2003. 3

香 川 県 教 育 委 員 会
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

序 文

香川県教育委員会では、四国横断自動車道や高松東道路の建設、高松空港跡地の整備など大規模開発に伴う埋蔵文化財の発掘調査と出土文化財の整理研究・報告書刊行業務を、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターに委託して実施しております。

このたび『県道多度津丸亀線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 中東遺跡』として刊行いたしますのは、県道多度津丸亀線建設に伴い平成11年度に発掘調査を実施した多度津町奥白方にあります中東遺跡についてであります。この遺跡の発掘調査では古墳時代中期ごろの埴輪片を多数含んだ古墳の周溝と、鎌倉時代の塚を中心に、柱穴などの遺構や土師器などの遺物を確認しました。これまで当該地周辺では本格的な発掘調査例は少なく、遺跡に隣接する県指定史跡盛上山古墳（もりづちやまこふん）との関連などを究明する上で大変貴重な資料を得ることができました。

本報告書が香川県の歴史を考える資料として広く活用されますとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心を深める一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土文化財の整理・報告にいたるまでの間、香川県土木部道路建設課及び関係諸機関並びに地元関係各位には多大な御協力と御指導をいただきました。

ここに深く感謝申し上げますとともに、今後ともよろしくご支援賜りますようお願い申し上げます。

平成15年3月

香川県教育委員会

教育長 惣 脇 宏

例　　言

1. 本報告書は、県道多度津丸亀線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書で、仲多度郡多度津町奥白方字中東1311番地地先に所在する中東遺跡（なかひがしいせき）の報告を収録した。
2. 発掘調査は、香川県教育委員会が香川県土木部道路建設課より委託を受け、香川県教育委員会が調査主体、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。
3. 発掘調査の期間および担当は以下のとおりである。

試掘調査 平成10年5月18～20日 西村尋文（香川県教育委員会文化行政課）

本調査 平成11年7月1日～8月31日 宮崎哲治 増井泰弘 糸山晋

4. 調査にあたって、下記の関係諸機関の協力を得た。期して謝意を表したい（順不同、敬称略）。

香川県土木部道路建設課、香川県普通寺土木事務所、地元自治会、水利組合

5. 本報告書の作成は、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが実施した。

本報告書の執筆・編集は、宮崎哲治が担当した。

6. 本報告書で用いる方位の北は、国土座標系第IV系の北であり、標高は東京湾平均海水位（T.P.）を基準としている。

また、遺構は基本的に下記の略号により表示している。

S D 溝状遺構 S K 土坑 S P 柱穴 S T 塚 S R 旧河道 S X 不明遺構

7. 遺構断面図の水平線上の数値は、水平線の標高地（単位m）である。

8. 土器観察表の中の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖1993年度版』に準拠する。

※ 地図は国土地理院地形図を使用しました。

目 次

序文

例言

第1章 調査の経過	1
第1節 調査にいたる経緯	1
第2節 調査の経過	1
1 調査・整理の経過	1
2 発掘調査および整理作業の体制	1
第2章 遺跡の立地と環境	3
第3章 調査の成果	6
第1節 調査の方法	6
第2節 調査区の概要	6
第3節 遺構・遺物	9
1. 古墳時代	9
溝状遺構	9
不明遺構	13
2. 中世	13
旧河道	13
墓（塚）	13
溝状遺構	17
土坑	17
柱穴群	18
3. 近世	18
墓	18
4. 時期不明の遺構	20
土坑	20
柱穴群	20
不明遺構	20
5. 包含層出土の遺物	20
第4章 まとめ	21
土器観察表	23
埴輪観察表	24
鉄器観察表	24
写真図版	
報告書抄録	

挿図目次

第1図 遺跡位置図	3	第11図 S T01平・断面図① (1/50)	14
第2図 周辺の道路 (1/10,000)	4	第12図 S T01平・断面図② (1/50)	15
第3図 調査区割図 (1/1,000)	6	第13図 S T01出土遺物① (1/4)	16
第4図 道構配置図 (1/200)	7	第14図 S T01出土遺物② (1/4)	17
第5図 調査区及びS R01土層断面図 (1/50)	8	第15図 道構平・断面図① (1/50)	18
第6図 S D01断面図 (1/50)	9	第16図 道構平・断面図② (1/50)	19
第7図 S D01出土遺物① (1/4)	10	第17図 S P02・12、包含層出土遺物 (1/4)	19
第8図 S D01出土遺物② (1/4)	11	第18図 S T02平・断面図 (1/20)	20
第9図 S X01平・断面図 (1/50)	13	第19図 S T02出土遺物 (1/4)	20
第10図 S R01出土遺物 (1/4)	13	第20図 中東遺跡道構変遷図 (1/400)	21

表目次

第1表 調査・整理の体制	2	第2表 周辺の遺跡一覧表	5
--------------------	---	--------------------	---

図版目次

図版1 調査区全景 (南から)	図版7 S T01完掘状況 (西から)
Ⅰ区全景 (東から)	S D01土層断面 (東から)
図版2 Ⅱ区全景 (南東から)	図版8 S R01土層断面 (東から)
Ⅱ区トレンチ全景 (南東から)	Ⅱ区 S R01土層断面 (北東から)
図版3 S T01五輪塔出土状況 (南東から)	図版9 S K03上層断面 (東から)
表土除去後のS T01 (北から)	S P01完掘状況 (南東から)
図版4 表土除去後のS T01 (東から)	図版10 S T02遺物出土状況 (南東から)
小礫層除去後のS T01 (東から)	盛土山古墳遠景 (北西から)
図版5 S T01石組検出状況 (北から)	図版11 中東遺跡出土遺物①
S T01石組内の遺物出土状況 (南から)	図版12 中東遺跡出土遺物②
図版6 S T01完掘状況 (北から)	
S T01完掘状況 (南から)	

第1章 調査の経過

第1節 調査にいたる経緯

県道多度津丸亀線建設事業は、朝の通勤状態緩和のため地元からの強い要望を受けて計画が進められてきたが、路線の一部が県史跡「盛土山古墳」の指定範囲の北辺付近にかかる計画が出されたため、香川県教育委員会は「盛土山古墳」の範囲確認調査を実施し、香川県土木部道路建設課（普通寺土木事務所）と協議を行い、指定範囲を避けるために路線を若干北方に移動することで合意した。このため、周知の埋蔵文化財包蔵地「中東1号墳」が路線予定地の西端で路線内に含まれることとなった。

当該事業における埋蔵文化財保護については、平成10年度に香川県教育委員会が路線予定地内（盛土山古墳付近の東西延長274m）において試掘調査を実施した。その結果、中東1号墳に隣接した部分で円筒埴輪片を含んだ包含層や小規模な溝・柱穴などの遺構を確認したが、この部分以外では部分的に存在する希薄な包含層や遺物を含まない小規模な溝数条を検出したのみであり、試掘調査をもって保護措置を終了している。香川県教育委員会はこの試掘調査によって文化財保護法に基づく事前の保護措置が必要とした対象地640m²についての発掘調査を、財團法人香川県埋蔵文化財調査センターに委託することとし、平成11年4月1日付で「埋蔵文化財調査契約書」を締結した。それに基づいて財團法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査を実施することとなった。

第2節 調査の経過

1. 調査・整理の経過

調査は事務所用地借地の交渉などの準備を経て、平成11年7月1日から8月31日の2ヶ月間で640m²について実施した。調査の体制は調査員3名による直営方式をとり、重機と人力を併用している。なお、中東遺跡の調査に関しては、原因者側のミスにより調査着手前に工事発注が行われてしまい、工事受注業者が調査の存在をまったく知らなかつたため工事施工の妨害と勘違いし無用の軋轢を生み出すことになった。開発側（原因者）と文化財保護行政側との連絡調整・意志疎通がおろそかになった結果であり、今後は十分な配慮が必要な事柄であると思われる。

整理作業は平成14年6月1日から7月31日の2ヶ月間で、調査員3名、整理作業員1名の体制で実施した。遺構の数や遺物の量が少ないとはいえる上記の体制ゆえ、予想以上に手間取る整理作業となった。

2. 発掘調査及び整理作業の体制

発掘調査及び整理作業の体制については第1表のとおりである。

なお、発掘調査に携わった方々は以下のとおりである。

現場整理作業員 漆原陽子

普通作業員 豊庭澄夫、秋山凱生、一葉直義、泉谷 宏、大川幸夫、桑島和茂、森岡富明

軽作業員 岡崎愛子、池田敬子、浦野房子、小野理恵、香川紀美子、香川貞美、香川芳子、金生法子、正嘉代子、高木一江、平井加寿美、松山枝美子、山口ハルミ、山田美佐江、横田八重子、好井桂子

整理作業に携わった方は以下のとおりである。

現場整理作業員 山本明美

		平成11年度（調査）		平成14年度（整理）	
香川県教育委員会事務局 文化行政課					
総括	課長	小原 克己	課長	北原 和利	
	課長補佐	小国 史郎	課長補佐	渡邊 勇人	
総務	係長	中村 権伸	副主幹	香川 浩章	
	主査	三宅 陽子	主査	須崎 陽子	
		松村 崇史		亀田 幸一	
埋蔵文化財	副主幹	廣瀬 常雄	副主幹	大山 真充	
	係長	西村 尋文	主任	片桐 孝浩	
	文化財専門員	森 格也	文化財専門員	古野 徳久	
	主任技師	塙崎 誠二		佐藤 竜馬	
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター					
総括	所長	菅原 良弘	所長	小原 克己	
	次長	川原 裕章	次長	渡部 明夫	
総務	副主幹兼係長	田中 秀文	副主幹	野保 昌弘	
	副主幹兼係長	六車 正憲	係長	多田 敏広	
	係長	新 一郎			
	主査	山本 和代			
調査	主任主事	細川 信哉			
	主任文化財専門員	大山 真充	主任文化財専門員	藤好 史郎	
	文化財専門員	西岡 達哉	文化財専門員	宮崎 哲治	
		宮崎 哲治	主任技師	松岡 晶	
		増井 泰弘	調査技術員	中里 伸明	
	調査技術員	糸山 晋	整理作業員	山本 明美	
	整理作業員	漆原 陽子			

第1表 調査・整理の体制

第2章 遺跡の立地と環境

香川県は四国の北東部に位置し、全国でもっとも面積の小さな県である。東西に細長く南北に短い地形のうち北側を平野が、南側を山地がほぼ半分の比率で占めている。南北に短いために短い河川が多く、山地で蓄えられた水はすぐに瀬戸内海に注いでしまうため、平野部での滞水は少ない。そのため、県下の至る所に大小さまざまな溜池が作られ、香川独特の景観を作り出している。



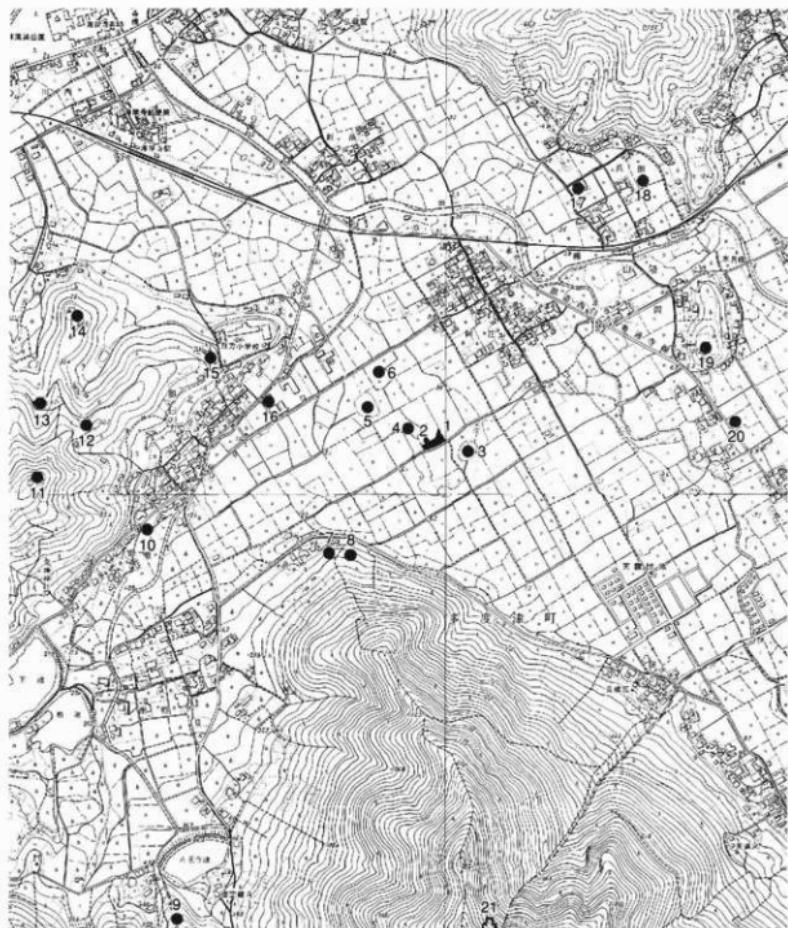
第1図 遺跡位置図

じものであるが、両者の間には氾濫原の存在が想定されている。

中東遺跡の周辺にも多数の遺跡が知られているが、そのほとんどは古墳であり、縄文時代や弥生時代の遺跡はまだ見つかっていない。このことは周辺の陸化がある程度進むのは古墳時代に入ってからということの傍証となるかもしれない。遺跡北西の黒藤山には全長30mの前方後円墳の黒藤山（くろふじやま）4号墳が位置し、昭和27年の発掘調査で人骨・刀剣・土器などが出土しており、古墳時代前期の築造である。中東遺跡西方の奥白方盆地には三角縁神獣鏡を出土した西山古墳がかつて存在していた。古墳時代中期になると、瀬戸内海を望む経尾山北麓に5世紀前半頃の円筒埴輪片が出土した全長48mの前方後円墳である御監山（みたらいやま）古墳が、また平野では2重の周溝をもつ墳丘直径42mの円墳である盛土山古墳が築造される。盛土山古墳では大正4年の発掘で出土した画文帶四神四獸鏡1面をはじめとする勾玉やトンボ玉などが東京国立博物館に収蔵されているほか、平成9年の範囲確認調査の際に周溝から円筒埴輪や蓋形埴輪片が出土しており、5世紀後半の築造と判明している。古墳時代後期になると天霧山山麓に向井原（むかいばら）古墳、黒藤山南麓に北ノ前（きたのまえ）古墳、遺跡北東の多度津山に宿地（しゆくち）古墳、向山（むかいやま）古墳など横穴式石室を主体部に持つ古墳が築造される。向井原古墳は一墳丘に2つの横穴式石室を有する円墳で、明治43年の発掘や昭和51年の調査の際に銀環や須恵器、鉄刀などが出土している。これら以外にも多数の古墳や箱式石棺などが存在したというが、ぶどう畑の開墾などによって失われたものも多いようである。また、古墳以外のものでは黒藤山

多度津町は仲多度郡の最北にあり、北側は備讃瀬戸に面している。香川県のほぼ中央部に広がる丸亀平野の北西部分にあたり、町内の東半は平野が西半は多度津山・天霧山塊があり、桜川・弘田川の2本の2級河川が貢流して瀬戸内海に注いでいる。海岸線は平均して遼浅であるが、近年の臨海工業化が著しく進み海岸線の形状も大きく改変されている。

遺跡の周辺の地形に目を向けてみると、遺跡の南方には天霧山、北西には経尾山から派生する丘陵が存在し、東方から北方にかけては弘田川の沖積作用がもたらせた平野が広がっている。遺跡南東に位置する盛土山古墳のすぐ北付近に認められる50cm程度の小崖は繩文海進による汀線である可能性が指摘されており、盛土山古墳と中東遺跡の立地する安定した段丘面は同



第2図 周辺の遺跡（1/10,000）

の北東斜面にTK 10並行期の須恵器窯である黒藤窯跡が知られている。

盛土山古墳の周囲には中東1号墳を含めた塚状を呈するものや頂部をぶどう畑として削られた高まりなどが存在している。これらは大型古墳の残骸であるとされ全体で中東古墳群を形成していると把握されているが、調査されたものではなくその内容については不明である。県下では水田耕作時に土中から出土した礫を集めたものが塚として伝えられているものも存在していることから、古墳ではないものを含んでいる可能性は高い。

番号	遺跡名	よみ	備考
1	中東遺跡	なかひがしいせき	今回の調査地
2	中東1号墳	なかひがし1ごうふん	中東古墳1(町史)
3	盛土山古墳	もりつちやまこふん	盛土山古墳1(町史)
4	(遺跡台帳未掲載)		盛土山3号墳(町史)
5	中東2号墳	なかひがし2ごうふん	盛土山2号墳(町史)
6	中東3号墳	なかひがし3ごうふん	中東古墳2(町史)
7	向井原1号墳	むかいばら1ごうふん	
8	向井原2号墳	むかいばら2ごうふん	
9	八王子古墳	はちおうじこふん	
10	北ノ前古墳	きたのまえこふん	
11	黒藤山4号墳	くろふじやま4ごうふん	
12	黒藤山5号墳	くろふじやま5ごうふん	
13	黒藤窓跡	くろふじかまと	
14	東北浦古墳	ひがしきたうらこふん	
15	朝日山古墳	あさひやまこふん	
16	寺前古墳	てらまえこふん	
17	来付1号墳	きつけ1ごうふん	
18	来付2号墳	きつけ2ごうふん	
19	船岡山遺跡	ふなおかやまいせき	
20	桑木古墳	くわきこふん	
21	天霧城跡	あまぎりじょうあと	

第2表 周辺の遺跡一覧表(番号は第2図と対応する)

参考文献

- 香川県 1988『香川県史』第1巻通史編 原始・古代 香川県
 多度津町史編纂委員会 1990『多度津町史』多度津町
 香川県教育委員会 1983『新編 香川叢書』考古篇 新編香川叢書刊行企画委員会
 木下晴一 1998『県史跡 盛土山古墳—範囲確認調査報告書—』香川県教育委員会

第3章 調査の成果

第1節 調査の方法

調査対象地をほぼ東西に二分するように地境の水田畔が存在していたため、これを基準に西側をI区、東側をII区として調査区割りを行い調査を実施した。香川県教育委員会が行った試掘調査の結果からI区は部分的に遺構面が複数存在することや、II区の大半は旧河道に当たることが判明していたため、2ヶ月という短い調査期間を有効に活用すべく、II区に関してはトレンチ調査という手法をとった。両区とも、遺構面直上までは重機を使用して掘り下げ、そこからは人力に切り替えて作業を行っている。

道路のように対象地が長大な場合の調査に際しては、路線中心線を基準に20m方格を設定して杭を打設して測量を行い国土座標との対応を図ることが多いが、今回の調査は対象面積も小さくいびつな形を呈していたため、国土座標を用いた20m方格を設定して基準とした。

遺構測量については、航空測量を用いて全体の平面図を作成し、断面図及び必要な平面図は手書きで作成している。遺構写真は写真用足場2段及び高所作業車を使用して撮影している。

また、調査終了後には一部の深掘り・断ち割りを実施して、下層遺構の有無の確認を行った後、重機を用いて埋め戻しを行った。

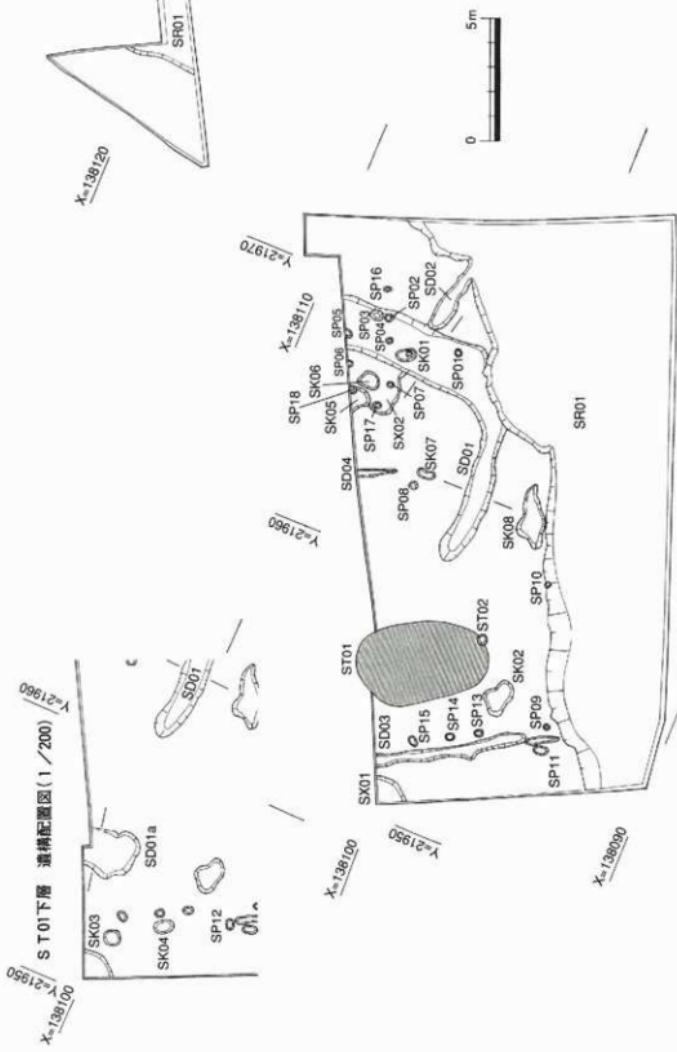
第2節 調査区の概要

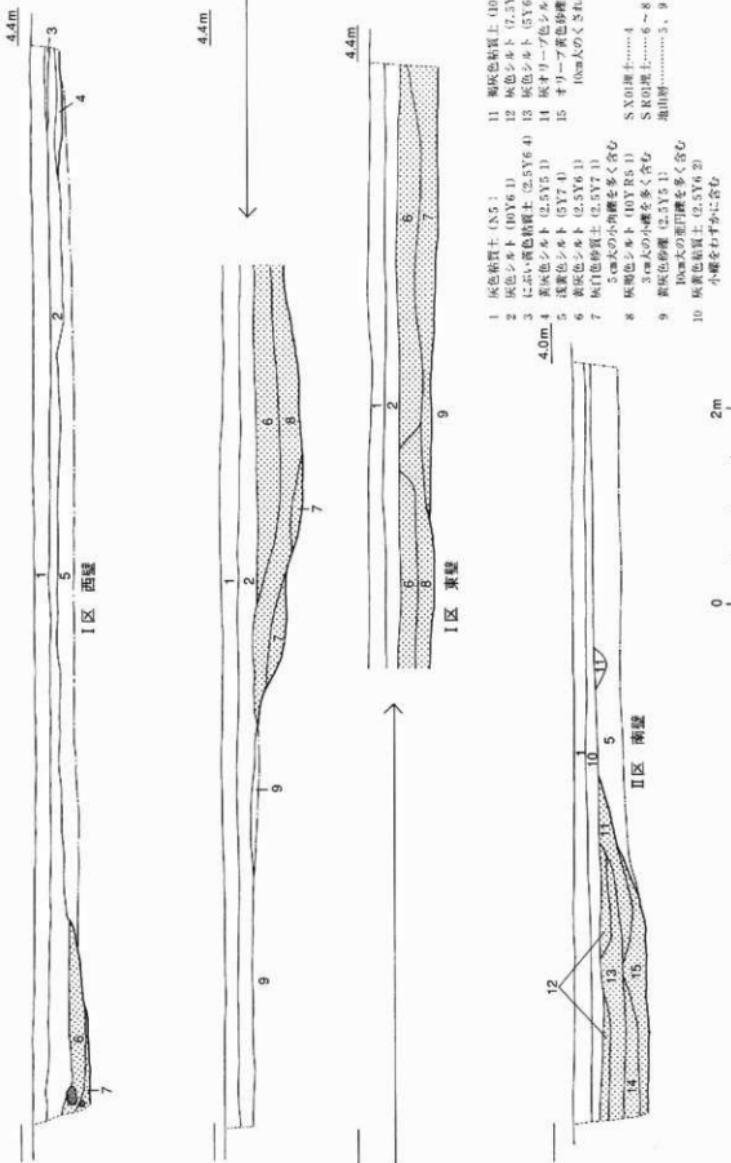
調査対象地西側のI区は、調査前の地目は出であり、水田として利用されてきた。ほぼ中央には周知



第3図 調査区割図 (1/1,000)

第4図 造構配置図(1/200)





の埋蔵文化財包蔵地である「中東1号墳」(塚)が存在している。基本土層序は、耕作土・床土直下に中世から近世の遺物をわずかに含んだ希薄な包含層である灰色シルト層が存在しており、その下位には浅黄色シルト層と拳大の亜円礫を多量に含んだ灰色砂礫層が認められる。この2つの土層は調査区北半においては同じレベルでマーブル状に絡み合っているが、基盤となる黄灰色礫層の微凹地部分に浅黄色シルト層が堆積したものであり、調査区の南半に存在する旧河道の底面は黄灰色礫層となっている。I区の遺構はすべてこの2つの土層の上面で検出している。

I区で検出した遺構は、土坑8基、柱穴18基、墓2基、溝状遺構4条、不明遺構2基、旧河道1本である。柱穴のなかには規則的に並ぶものも認められるが、明確に掘立柱建物を構成するものは認められない。溝状遺構は正方位を指向するもの、周囲に遺存する条型里地割に合致する方向を持つもの、不整方向を持つものなどが見られる。正方位を指向するものはL字状に屈曲するもので、埋没後に作られた「中東1号墳」の下位でその続きを検出している。

調査対象地東側のII区も、調査前の地目は田で、水田として利用されてきた。調査地内は二筆に分割されており、現地表高を比較すると北側の水田が約30cm低くなっている。基本土層序は、耕作土・床土直下にI区の旧河道底面で見られた黄灰色砂礫層の続きが認められる。

II区で検出した遺構には、I区から連続する旧河道1本がある。

第3節 遺構・遺物

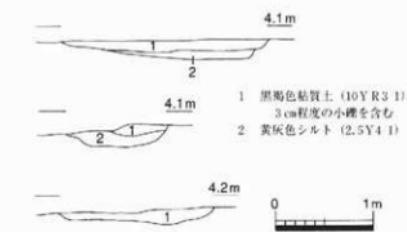
1. 古墳時代

溝状遺構

S D01 (第6~8図)

I区のほぼ中央部北寄りに位置する。平面の形態はL字状を呈しており、概ね直角に屈曲している。屈曲部分をS R01に削り取られている。溝状遺構の方向は正方位と一致している点は特筆できる。後述

する塚S T01の下位において、S D01と同様の黒褐色粘質土(10YR3/1)3cm程度の小礫を含むS D01aを確認しており、途中で途切れるもののS D01は方形にめぐる溝状遺構であったと判断できる。溝状遺構の内部からは円筒埴輪片、朝顔形埴輪片などが出土しているが、量的には円筒埴輪片が圧倒的に多い。遺物はいずれも溝状遺構の底面に接しておらず、埋土中に含まれた状態で出土している。換言すれば、埴輪は溝状遺構の外から転落してきたものと言えよう。すなわち、S D01は埋葬主体部(石室)の痕跡を残さないほどに破壊された方墳の周溝の痕跡であると判断できる。

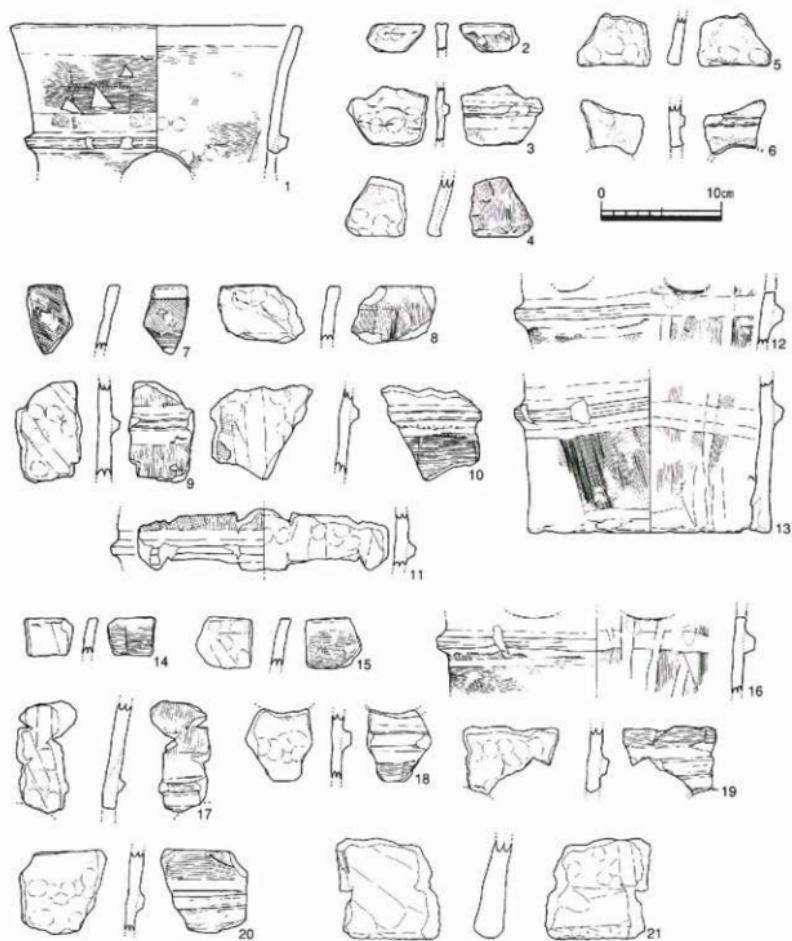


第6図 S D01断面図 (1/50)

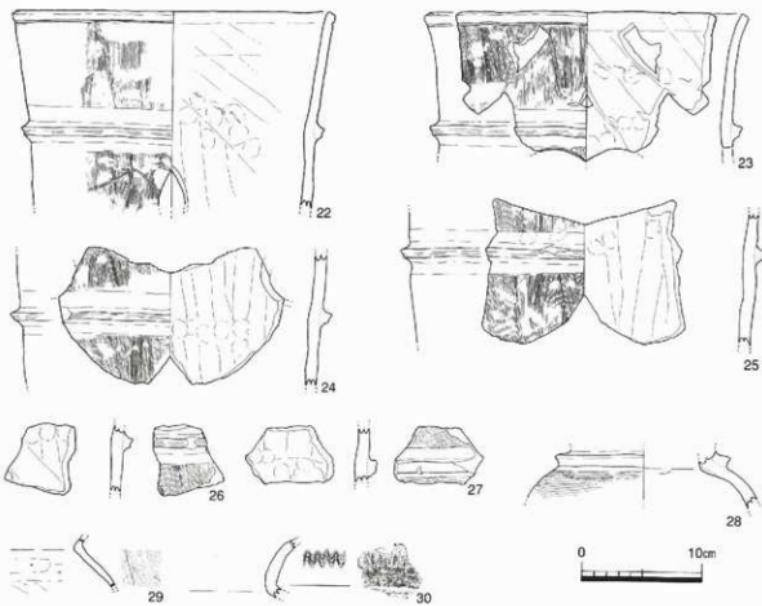
(石室)の痕跡を残さないほどに破壊された方墳の周溝の痕跡であると判断できる。

1から28は出土した埴輪のうち代表的なものを図化した。ここでは観察した項目ごとにその特徴を記述する。なお、埴輪片はS D01以外に後述するS R01・S P02・S T01からも僅かに出土しているが、本来はS D01に属するものであるためここで含めて記述する。

出土した埴輪は破片・細片の状態であり全体が判別できるものはない。確認できた器種は普通円筒埴



第7図 SD01出土遺物① (1/4)



第8図 SD 01 出土遺物② (1/4)

輪と朝顔形埴輪の2種類で、確実に形象埴輪と言えるものは認められない。胴部や底部としたものには朝顔形埴輪や形象埴輪のものが含まれている可能性もあるが、その識別は困難である。

形態・法量 全体を復元できるものはないため、形態について直接うかがい知ることはできない。遺物観察からは、直立気味の底部（13）から胴部（16）に緩やかに外反する口縁部（1）を持つものと底部から口縁部に向かって緩やかに外傾するもの（22、24）の2タイプが推定できる。法量は、口径24.0cm（1）と28.8cm（22、23）、底径20.0cm（13）、胴部径22.0cm（1、12、13）から30.0cm（25）に復元できる。全高は判明しないが、口縁部高9.6cm（1）と9.4cm（22、23）、底部高10.2cm（13）が判明している。

成形 基部は幅4cm程度の粘土帯を使用しているもの（13）が認められる。基部の上に積み上げられた粘土紐は幅2cm程度のものを使っているものがある。巻き上げの方向のわかる資料はなかった。また、底面に植物や板などの圧痕も認められない。

調整 外面調整は1次調整にタテハケを施し2次調整にヨコハケを施すもの（調整A）と、タテハケのみの調整で終わるもの（調整B）の2タイプがほぼ半々の比率で認められる。調整Aのヨコハケには断続的なヨコハケ（川西氏のA種ヨコハケ）、静止痕の残る連続的なヨコハケ（川西氏のB種ヨコハケ）が認められる。破片のため判別が難しいが、静止痕のない連続的なヨコハケ（川西氏のC種ヨコハケ）も含まれている可能性がある。静止痕については、そのほとんどが突帯に対して垂直になるものだが、一

部には静止痕が斜めになっているものも見受けられる。底部（第1段目）の外面調整としてはタテハケのみのもの（4、13）とタテハケをナデ消すもの（5）があるが、タテハケをナデ消すものは底部でしか認められない調整である。内面調整はハケやナデが主流で、ハケのみのもの、ハケをナデ消すもの、ナデのみのものなどが認められる。また、口縁部内面のハケにはナナメハケやヨコハケ、タテハケが見られる。

口縁部の形態 口縁部の形態は、緩やかに外反する口縁部（1）と緩やかに外傾するもの（22、23）の2つが見られる。口縁端部の形態は、端部が平らで外傾する面を持つもの（22、23）とナデによって外方へわずかに肥厚気味のもの（1、2、7、8、14、15）がある。

タガ 全体の形状が判明しないため、タガの条数及びタガ間の寸法については判別できない。少量ではあるもののタガの剥離した部分の観察からは、タガの貼り付け位置に刺突や沈線、線状のナデなどは認められない。また、いわゆる断続ナデ技法を示すような資料も認められない。断面の形状をみると、台形、M字形、方形、三角形の4つがみられる。M字形はさらに上端部の突出度が高いものとそうでないものに細分が可能であり、前者は濁褐色を呈するいわゆる須恵質埴輪（22～26）と対応する。また、方形のものは白褐色を呈する軟質のもの（3、6）に限定される。タガの高さと幅であるが、台形は高さ0.5～1.1cm・幅1.1～2.6cm、M字形は高さ0.6～1.3cm・幅1.1～2.3cm、方形は高さ0.6～0.9cm・幅0.9～1.7cm、三角形は高さ0.9cm・幅1.4cmの数値を示す。また、比率は台形とM字形がほぼ同数で約4割ずつをしめ、方形が2割で続いている。

透し孔 透し孔についても全形及び施される位置が判明する資料はないが、すべて円形に復元できるものばかりである。透し孔は突帯貼り付け後や2次調整が施された後に穿孔されたもの（1）が認められる。穿孔には鉄製のヘラ状工具のような鋭利な工具を用いており、内側の透し孔の円周上に押し出された粘土が肥厚していることから、外側から内側に向かって穿孔がなされている。透し孔が施される位置は1、22、23などから口縁部の下の段に施されることは判明しているが、全形が判明しないために何段目に透し孔を施すのかについてはわからない。

ヘラ記号 ヘラ記号を施したもののは図化した20と22を含めて4点ある。ヘラ記号の全容については判断できる資料はない。いずれも1条の簡単なヘラ書きであり、弧の一部分と判断できる。22は口縁部の下の段に施された透し孔からヘラ書きを始めているが、それ以外については何段目に施されているのかは判明しない。

胎土 内眼観察によると、胎土中に混入された砂粒の構成は石英・長石が中心でほぼ一定しており、それ以外には赤色粒を含むものがみられる。赤色粒を含むものは、色調が白褐色のものに限定される傾向があるようである。なお、雲母やチャートなどは含まれてはいない。

焼成と色調 堅継に焼成された硬質のものと、土師質に焼成された軟質のものの2種類が認められるが、軟質のものが大半（約8割）を占める。色調は焼成時の火の回り具合による色調の変化も想定できるため明確に区別できていない可能性もあるが、硬質のものには白褐色・赤褐色・濁褐色が、軟質のものには白褐色・赤褐色・黄褐色がみられる。硬質のうち濁褐色を呈するものはいわゆる須恵質埴輪である。两者ともに黒斑の付いたものはまったく見受けらず、窯窓焼成によるものと判断できる。

第7・8図の図化したものでは、1が硬質の白褐色、2～6が軟質の白褐色、7～11が硬質の赤褐色、12・13が黄褐色、14～21が軟質の赤褐色、22～27が硬質（須恵質）の濁褐色という対応となる。

28は朝顔形埴輪の肩部である。なだらかな曲線を描く肩部をしており、頸部には断面三角形のタガを

貼り付けている。29は弥生土器ないし土師器の壺片であり、S D01に先行するS X02からの混入であろう。30は須恵器壺の口頭部で外面に櫛描きの波状文を施す。これらの埴輪は川西編年IV期の特徴を備えており、概ね5世紀後半頃のものとみられる。

不明遺構

S X01 (第9図)

I区の北西隅に位置し調査区外に連続する。平面の形態は円形の土坑状を呈しており、当該期に属するとみられる土師器細片が少量出土している。

2. 中世

旧河道

S R01 (第5・10図)

I区の南半に位置し、II区のトレチ東半に連続しているもので、西方から流下して調査区で大きく北方へ流れを変えている。北から西の岸部分は検出したが対岸は確認しておらず、幅は8m以上で、深さは検出面から0.5mである。河床は疊混じりの砂質上層で現在でも湧水が認められる。理上からは土師器の杯や

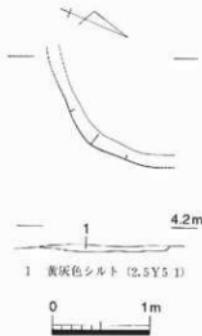
皿、須恵器の皿、土師質上器の足釜、瓦器椀片などの中世の遺物とともに、S D01からの流入とみられる円筒埴輪片が若干出土している。31~35は土師器の小皿である。36~39は土師器の杯である。いずれも底部が系切りのものとヘラ切りのものがある。40は円盤状高台の小皿である。

墓（塚）

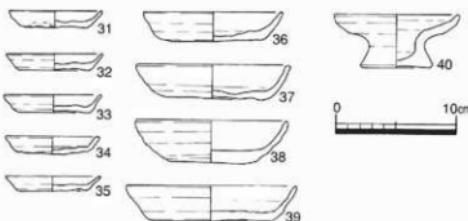
S T01 (第11~14図)

I区の北西付近に位置する。遺跡台帳では周知の埋蔵文化財包蔵地「中東1号墳」として登録されてきたものである。平面形態は橢円形をしており、調査着手前の規模は長径5.4m、短径3.2m、高さは現地表から1.2mを測る。かつては塚の頂部に小さな祠をおまつりしていたとの地元からの聞き取りを得ていたが、現状では小さな祠の石材が散在している。調査の結果、古墳ではなく内部に石組みを持った塚（墓）であることが判明した。

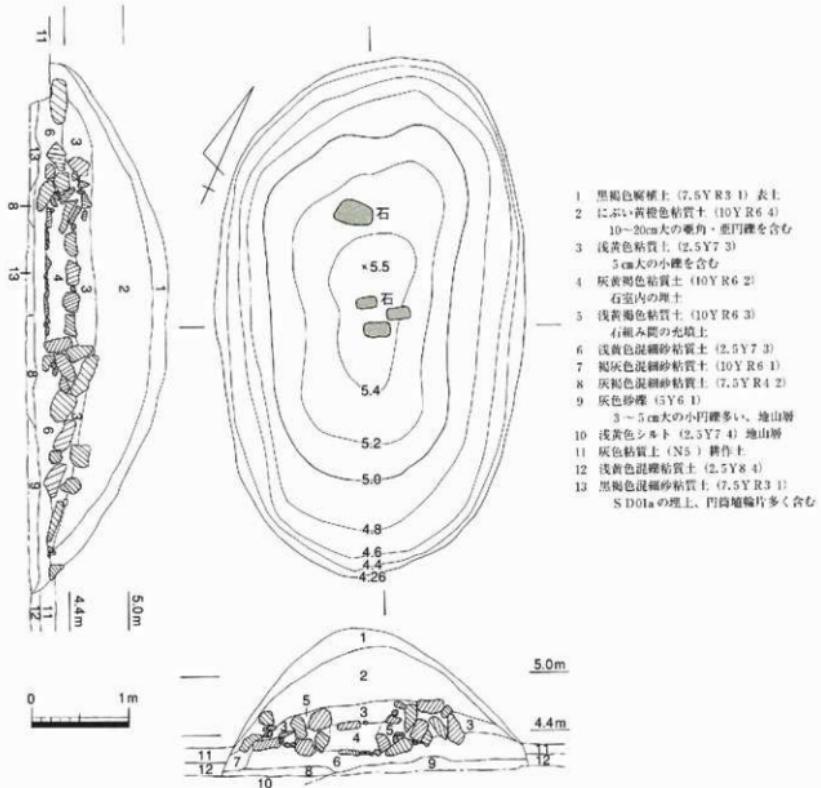
構築順序であるが、まず地山上に厚さ20cm程度に浅黄色混細砂粘質土を盛り土して整地を行う。次に塚のほぼ中央部分に、塊石を用いて内法で長さ1.6m、幅0.6mの長方形をした箱式石棺状の埋葬施設を作る。使用している塊石は長さ50cm、幅30cm前後のもので、小口積みや平積みにするのではなく石を横長に立てたような状態で使用している。なお、この箱式石棺状の埋葬施設の床面には側壁に用いた石と同様の塊石をほぼ30cm間隔で3つ配置している。この3石は埋葬施設の主軸と直行する方向に、なおかつ高さを揃えるように並べており、さらにその隙間に高さを揃えるように、拳大の蝶を用いて充填することで床面を構築している。埋葬施設の周囲には側壁や小口の石の外側に接するように、同様の塊石



第9図 S X01平・断面図 (1/50)

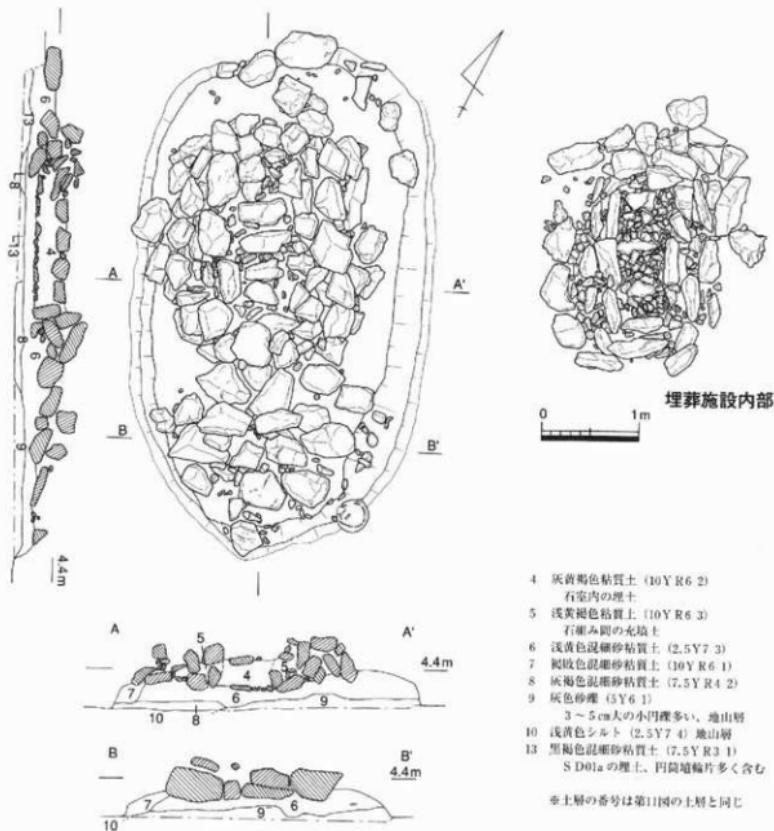


第10図 S R01出土遺物 (1/4)



第11図 S T01平・断面図① (1/50)

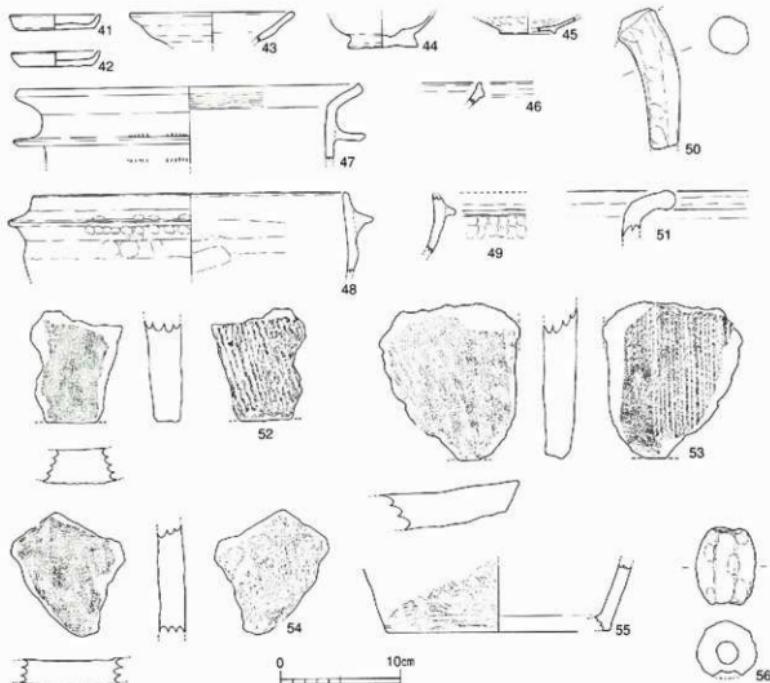
を横長に立てて巡らせており（ここでは控えの石列と呼称する）、側壁との隙間には床面で使用した拳大小礫を充填している。さらにこの控えの石列の周りにはもう一重の石列（ここでは控えの石列2と呼称する）が巡らされている。控えの石列2は北・東・南側では控えの石列1に接するように横長に石を立てて巡らされているが、西側部分だけは10~20cm程度の空間をおいて石を立てずに横置き状態で配列しているという違いが見受けられる。なお、西側のこの空間にも拳大小礫が充填されていた。その後、同様の規模の石材を使って、控えの石列2を外周としながら埋葬施設の空間を残すようにさらに2段分を積み上げる。石材は基本的に横置きで使用しているが、控えの石列間の空間部分などは立てた状態や斜めになつた状態となっている部分もある。この石組みのすぐ南側に接して同様の石材を3段分積み重ねた石組みを構築しているが埋葬施設などは有しておらず、何らかの意図を持って構築されたものであろうが、その目的は判明しない。埋葬施設に木棺を安置した後に、木棺の上部に長さ50cm、幅25cm程度



第12図 ST01平・断面図② (1/50)

の塊石を主軸と直行する方向に4石のせて蓋石としている。検出した状態では蓋石と床面の間隔は20cm程度であったが、内部に収められていた木棺が朽ちた際に蓋石がずり落ちたとみられ、本来の蓋石の位置は周囲の石積みの高さと同じであったものと思われる。最後に拳大の小蝶とにぶい黄橙色粘質土で石組み全体を覆っている。この最後の覆土の上面には角螺旋凝灰岩製の五輪塔の笠部がひっくり返った状態で含まれていた。また、小蝶の上部には大きさの不揃いな蝶や近世陶磁器片なども含まれていることから、後世に耕作の妨げになった蝶などを塚の上面に集めたことがうかがえる。

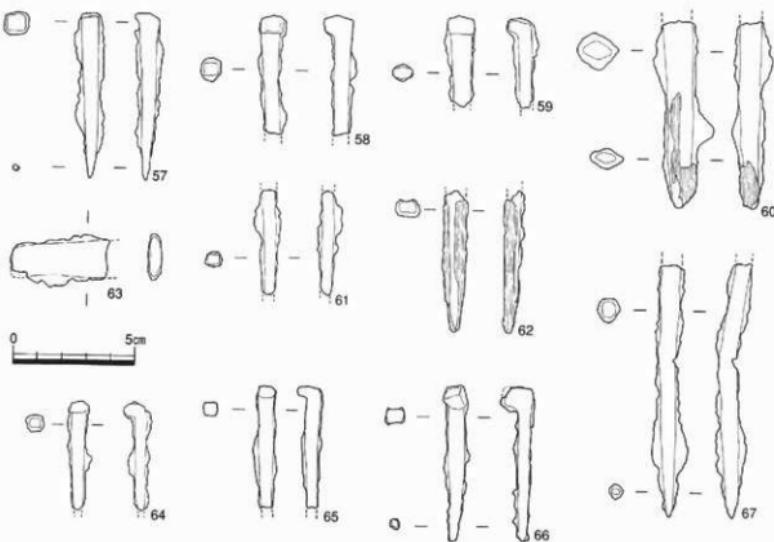
溝状遺構SD01の部分でも述べたが、このST01の基部にあたる整地層の下位でSD01aを検出している。このSD01aはすでに上面を削平された状態であったことや、ST01の一部は方墳と重なってい



第13図 ST01出土遺物① (1/4)

ことから、ST01を構築する前までに方墳が破壊されていたことがわかる。また、ST01の埋葬主体の石組みに使用された石材は、かなり角がしっかり残った石材で、ST01の底面あたりでみられた亜円礫とは大きさも異なるものである。確証はないが、破壊されていたもししくは塚を築くに当たって破壊した古墳の埋葬主体である石室に使用されていた石材を転用した可能性も考えられよう。

ST01の表土からは近世・近代の陶器片に混じって有孔土錘・古代の平瓦片・中世の土師質土器・土師器・須恵器・備前焼片などが、小砾とにぶい黄橙色粘質土の層からは中世の上師質土器足釜片・土師器・須恵器・瓦器・青磁片・平瓦片などが、塊石の石組みの間からは上師器椀・須恵器・瓦器細片・鉄釘などが、埋葬施設の内部からは上師質土器足釜片・鉄釘がそれぞれ出土している。41~43は小砾層から出土した土師器である。44は石組みの間から出土した土師器の円盤状高台をもつ杯である。45は瓦器椀の底部破片、46は東播系須恵器のこね鉢口縁部、47は土師質土器羽釜、48・49は土師質土器足釜の口縁部、51は土師質土器腹片で、いずれも小砾層から出土している。52から54は内面に布压痕、外面に繩目の平行叩きを持つ平瓦で、52が小砾層から、53・54が表土層から出土している。55は須恵器壺の底部で石組みの間から出土している。56是有孔土錘で表土から出土している。57から67はST01から出土した鉄器で、57から59、61・62、64から66が釘である。60と67は釘のような形態を示すが、断面の形状



第14図 S T01出土遺物② (1/2)

が他の釘とは異なっており釘以外のものである可能性が高い。63は刀子ないし小刀の茎と思われる。57から60、61・62は埋葬施設の内部から、63と65は石組みの間から、64・66・67は小蝶層から出土している。

溝状遺構

S D02 (第15図)

I区の東壁付近に位置する。検出長約3m、幅0.7mで西端はS D01より新しく、東端はS R01と連続している。土師器細片がごく僅かに出土しているにすぎない。

土坑

S K03 (第15図)

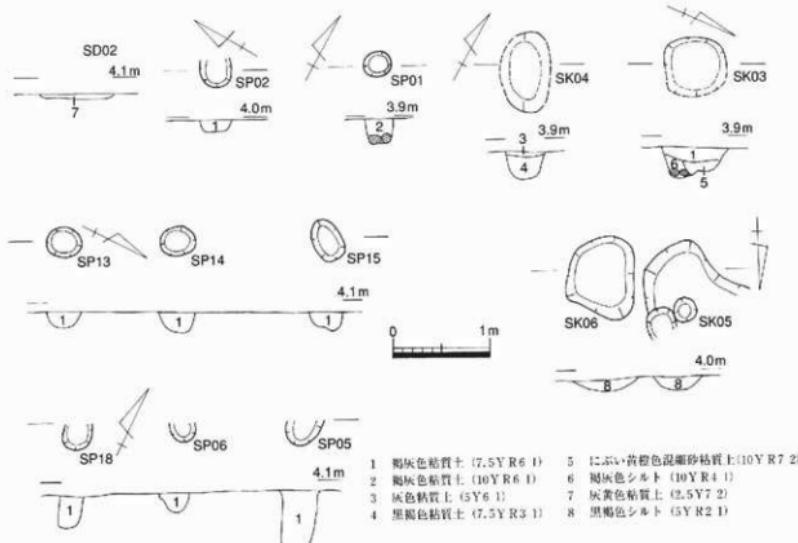
I区の北西隅付近に位置する。平面形態が隅丸方形を呈する土坑である。埋没後にS D03に一部を削平されている。須恵器壺片、土師器細片、円筒埴輪細片が出土している。

S K04 (第15図)

I区の西寄りに位置する。平面形態が梢円形を呈する土坑である。埋没後にS D03に上部を削られている。須恵器細片、土師器壺片が出土している。古代に属する可能性がある。

S K05 (第15図)

I区の東寄りで北半部が調査区外に連続している。平面形態が不整梢円形を呈する土坑である。時期不明のS X02が埋没してから穿たれており、S P18によって一部を削られている。土師器細片と古墳時代前期の土師器細片が出土しているが、後者はS X02からの混入であろう。



第15図 遺構平・断面図① (1/50)

S K 06 (第15図)

I区の東寄りでS K 05に隣接している。平面形態が隅丸方形を呈する土坑である。土師器細片と古墳時代前期の土師器細片が出土しているが、後者はS X 02からの混入であろう。

柱穴群 (第15~17図)

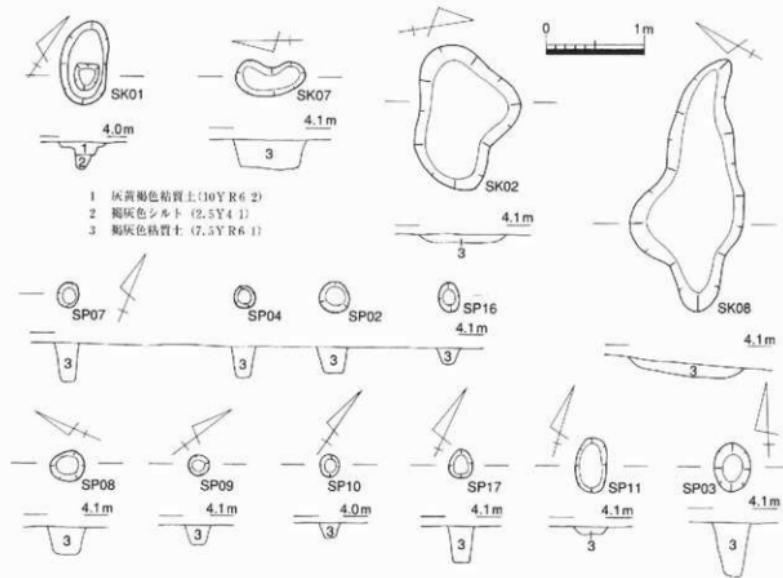
1区の東北隅付近のS D 01周辺と北西隅付近のS T 01西側の2ヶ所にまとまって柱穴を検出している。いずれの柱穴も褐色系の埋土を有しているもので、掘立柱建物を示すような並びを持つものは認められない。S T 01西側ではS P 13・14・15が、S D 01周辺では北壁沿いのS P 05・06・18とS P 07・04・02・16が一列に並んでいるようである。柱穴からは土師器や須恵器細片がごく僅かに出土しているものも見られるが、辛うじて時期の判別できる資料が出土したものを第15図に、できないものを第16図にまとめたが、第16図のS P 02は中世に属する柱穴である。柱穴出土遺物のうち図化できたものを第17図に掲載した。68・70は土師器の碗である。69の円筒埴輪片は、S P 02の基盤となっているS D 01の埋土からの混入である。

3. 近世

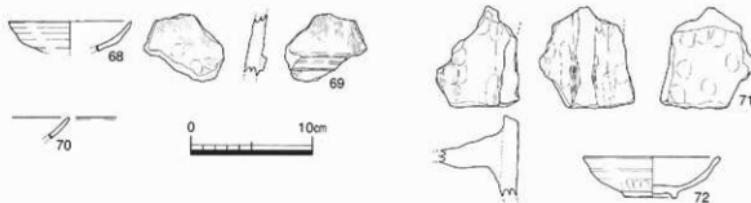
墓

S T 02 (第18・19図)

1区の西寄りに位置し、S T 01の裾部を掘り込んで作られている。S T 01の表土剥ぎの時点では全く存在がわからなかったが、小碟層を除去している途中で検出した。小碟の一部を除去して掘られていることから、S T 01よりは後出することは明確である。平面の形態は直径0.4mほどのほぼ正円形を呈す



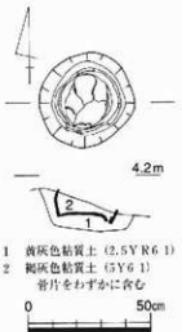
第16図 遺構平・断面図② (1/50)



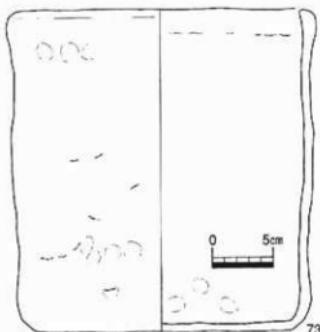
第17図 SP 02-12、包含層出土遺物 (1/4)

る土坑である。内部には近世以降のものと判断できる土師質土器の壺が1つ納められており、壺の内部に流入していた土の中からごくわずかではあるが人骨と思われる骨片が認められたため、墓と判断した。

73は、土師質土器の壺で、本来は灰落としなどの目的で作られたものだと思われるが、骨壺として転用されたものである。なお、蓋やその代用品については確認できず、本来蓋があったかどうかは判明しない。



第18図 S T02平・断面図 (1/20)



第19図 S T02出土遺物 (1/4) 73

4. 時期不明の遺構

土坑

S K01 (第16図)

I区の北東隅付近に位置する。平面形態は 0.9×0.5 mの楕円形を呈しており、中央部に直径約0.3mの柱穴状の落ち込みを有する。時期判別不能の土器細片が出土している。

S K02 (第16図)

I区の西寄りでS T01のすぐ南西に位置する。平面形態は 1.5×1.0 mの不整楕円形を呈している。

S K07 (第16図)

I区の中央部やや北寄りに位置する。平面形態は 0.7×0.3 mの空豆形を呈している。

S K08 (第16図)

I区の中央部やや南寄りでS R01の肩部分に位置する。平面形態は 2.1×1.2 mの不整形をしている。おそらく中世と思われる土器細片がわずかに出土している。

柱穴群 (第16図)

先に報告した柱穴群のうち明確に時期の判明しないものを第16図にまとめた。S P07・04・02・16の4基は一列に並んでいるようにもみえる。埋土はすべて中世の柱穴と同じ褐色系の土層であり、おそらくすべて中世に属する柱穴であろうと思われる。

不明遺構

S X02

I区の北東隅付近に位置する遺構で北側は調査区外に連続している。S D01に先行するが、時期の判明する遺物は認められない。ただし、埋土を上部から切り込んだ遺構に混入して出土した遺物は古墳時代前期の土師器片であり、それ以前にさかのばる時期の遺構である可能性はある。

5. 包含層出土の遺物 (第17図)

71は土師質の壺の破片である。72は土師器碗である。底部外面付近に明瞭な指頭圧痕を残す特徴を持つもので、吉備系の土師器碗である。

第4章　まとめ

以上、中東遺跡の調査で検出した遺構・遺物について述べてきた。対象面積も小さく、期間も短い調査ではあったが、最後に遺構の変遷をたどってまとめとしたい。

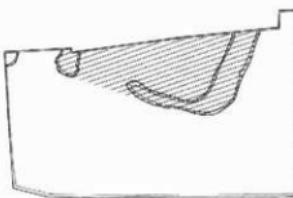
1. 古墳時代

I区で方墳の周溝と判断できる溝状遺構 S D01を検出した。一辺が約15mに復元できる方墳の墳丘は完全に削平を受けており、埋葬主体部の有無すら判然としない状態である。S D01の中からは円筒埴輪片が出土したが、これらは溝状遺構の中に立て巡らされていたものではなく、方墳の墳頂部に立てられていたものが周溝である S D01に転落してきたものである。埴輪の年代観からこの古墳は南東約60mに位置する5世紀後半の盛土山古墳とほぼ同時期の築造とみられ、盛土山古墳の被葬者の一族や近親のものが葬られたものと考えられる。当時、当該地周辺は多度津山と天霧山塊に挟まれた入り海になっていたらしく、良好な津（港）が存在していた可能性が高い。瀬戸内海の港々に寄航しながら旅してきた人々がこの津に入港してきた時には、水際に盛土山古墳と並び立つ方墳の壯麗な姿が映ったことであろう。

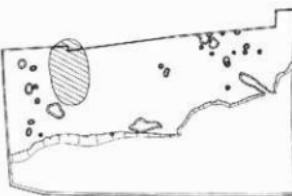
2. 中世

この墳になると陸化は進み、周辺には条里型地割が施行されている。遺跡内では南側を旧河道が流下し、その北岸付近に S T01や土坑・柱穴群がみられる。これらの遺構から出土した遺物の時期は、概ね13世紀後

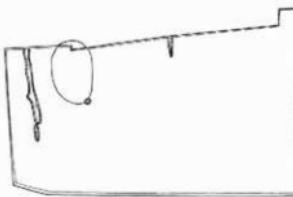
古墳時代



中世



近世



第20図 中東遺跡遺構変遷図（1／400）

半を中心とした時期である。この頃までの間に方墳は削平を受けて潰されていたらしく、すでに削平を受けた周溝の名残を S T01 の下位で検出している。また、S T01 の埋葬施設に使用された石材は方墳の埋葬施設のものを再利用した可能性が高い。S T01 は単純な土壙墓などとは異なってかなり丁寧に手間をかけて構築されているが、青磁碗などの副葬品は認められない。中世段階では居住域に隣接して墓が営まれている例が知られており、周囲にみられる土坑や柱穴群は調査区の北側や西側に広がる居住域の一部になる可能性もある。

3. 近世

この時期の遺構としては条里型地割と同じ方向を持つ小規模な溝状遺構 2 条がみられる程度で、現在の田園風景とほとんど変わらない風景が広がっていたと思われる。S T01 の南東の裾部には、上師質土器の壺を骨壺に転用した S T02 が作られている。

参考文献

- 上山 謙 1997 「出土埴輪から見た古市古墳群の構成」『堅田直先生古希記念論文集』堅田直先生古希記念論文集刊行会
川西宏幸 1978 「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号 日本考古学会
片桐孝浩 1990 「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第8冊 延命遺跡」香川県教育委員会ほか
片桐孝浩 1992 「中小河川大東川改修工事(津ノ郷橋~弘光橋間)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 川津元結木遺跡」
香川県教育委員会ほか
木下晴一 1998 「県史跡 盛土山古墳一範圍確認調査報告書」香川県教育委員会
坂 靖 1988 「埴輪編年と技法伝播の問題」『考古学と移住・移動』森浩一編
廣瀬常雄 1994 「昭道山崎御既線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 正箱遺跡・薬王寺遺跡」香川県教育委員会ほか

觀 察 表

中東遺跡土器觀察表

中東遺跡 墓輪觀察表

編號 圓版	遺物名	口部直径 (mm)	底土	色調 (外面)	色調 (內面)	外 面 調 整		内 面 調 整		底 地 狹 存 度		備 考
						左	右	左	右	左	右	
1	SD 01	11:24.0m 小石英長石粒, 灰白褐色 (WY R 8 2)	灰褐色 (WY R 8 2)	灰褐色 (WY R 8 2)	灰褐色 (WY R 8 2)	6.7	7.0	5.2	5.5	5.5	5.5	円形底丸孔
2	SD 01	小石英長石粒, 灰白褐色 (WY R 8 2)	灰褐色 (WY R 8 1)	灰褐色 (WY R 8 2)	灰褐色 (WY R 8 2)	6.7	7.0	5.2	5.5	5.5	5.5	円形底小穿孔
3	SD 01	小石英長石粒, 灰白褐色 (WY R 8 2)	灰褐色 (WY R 8 1)	灰褐色 (WY R 8 2)	灰褐色 (WY R 8 2)	6.7	7.0	5.2	5.5	5.5	5.5	円形底小穿孔
4	SD 01	小石英長石粒, 灰白褐色 (WY R 8 2)	灰褐色 (WY R 8 1)	灰褐色 (WY R 8 2)	灰褐色 (WY R 8 2)	6.7	7.0	5.2	5.5	5.5	5.5	円形底小穿孔
5	SD 01	小石英長石粒, 灰白褐色 (WY R 8 2)	灰褐色 (WY R 8 1)	灰褐色 (WY R 8 2)	灰褐色 (WY R 8 2)	6.7	7.0	5.2	5.5	5.5	5.5	円形底小穿孔
6	SD 01	小石英長石粒, 灰白褐色 (WY R 8 2)	灰褐色 (WY R 8 1)	灰褐色 (WY R 8 2)	灰褐色 (WY R 8 2)	6.7	7.0	5.2	5.5	5.5	5.5	円形底小穿孔
7	SD 01	小石英長石粒少, 灰褐色 (WY R 8 4)	灰褐色 (WY R 8 3)	灰褐色 (WY R 8 4)	灰褐色 (WY R 8 4)	6.7	7.0	5.2	5.5	5.5	5.5	円形底小穿孔
8	SD 01	小石英長石粒少, 灰褐色 (WY R 8 4)	灰褐色 (WY R 8 3)	灰褐色 (WY R 8 4)	灰褐色 (WY R 8 4)	6.7	7.0	5.2	5.5	5.5	5.5	円形底小穿孔
9	SD 01	小石英長石粒少, 灰褐色 (WY R 8 4)	灰褐色 (WY R 8 3)	灰褐色 (WY R 8 4)	灰褐色 (WY R 8 4)	6.7	7.0	5.2	5.5	5.5	5.5	円形底小穿孔
10	SD 01	小石英長石粒少, 灰褐色 (WY R 8 4)	灰褐色 (WY R 8 3)	灰褐色 (WY R 8 4)	灰褐色 (WY R 8 4)	6.7	7.0	5.2	5.5	5.5	5.5	円形底小穿孔
11	SD 01	小石英長石粒少, 灰褐色 (WY R 8 4)	灰褐色 (WY R 8 3)	灰褐色 (WY R 8 4)	灰褐色 (WY R 8 4)	6.7	7.0	5.2	5.5	5.5	5.5	円形底小穿孔
12	- SD 01	灰22.0m 小石英長石粒少, 灰褐色 (WY R 8 4)	灰褐色 (WY R 8 4)	灰褐色 (WY R 8 4)	灰褐色 (WY R 8 4)	6.7	7.0	5.2	5.5	5.5	5.5	円形底小穿孔
13	SD 01	小石英長石粒少, 灰褐色 (WY R 7 6)	灰褐色 (WY R 6 4)	灰褐色 (WY R 7 6)	灰褐色 (WY R 6 4)	6.7	7.0	5.2	5.5	5.5	5.5	円形底小穿孔
14	SD 01	小石英長石粒少, 灰褐色 (WY R 7 6)	灰褐色 (WY R 6 4)	灰褐色 (WY R 7 6)	灰褐色 (WY R 7 6)	6.7	7.0	5.2	5.5	5.5	5.5	円形底小穿孔
15	SD 01	小石英長石粒少, 灰褐色 (WY R 7 6)	灰褐色 (WY R 6 4)	灰褐色 (WY R 7 6)	灰褐色 (WY R 7 6)	6.7	7.0	5.2	5.5	5.5	5.5	円形底小穿孔
16	SD 01	小石英長石粒少, 灰褐色 (WY R 7 6)	灰褐色 (WY R 6 4)	灰褐色 (WY R 7 6)	灰褐色 (WY R 7 6)	6.7	7.0	5.2	5.5	5.5	5.5	円形底小穿孔
17	- SD 01	小石英長石粒少, 灰褐色 (WY R 7 6)	灰褐色 (WY R 6 4)	灰褐色 (WY R 7 6)	灰褐色 (WY R 7 6)	6.7	7.0	5.2	5.5	5.5	5.5	円形底小穿孔
18	SD 01	小石英長石粒少, 灰褐色 (WY R 7 6)	灰褐色 (WY R 6 4)	灰褐色 (WY R 7 6)	灰褐色 (WY R 7 6)	6.7	7.0	5.2	5.5	5.5	5.5	円形底小穿孔
19	SD 01	小石英長石粒少, 灰褐色 (WY R 7 6)	灰褐色 (WY R 6 4)	灰褐色 (WY R 7 6)	灰褐色 (WY R 7 6)	6.7	7.0	5.2	5.5	5.5	5.5	円形底小穿孔
20	- SD 01	小石英長石粒少, 灰褐色 (WY R 7 6)	灰褐色 (WY R 6 4)	灰褐色 (WY R 7 6)	灰褐色 (WY R 7 6)	6.7	7.0	5.2	5.5	5.5	5.5	円形底小穿孔
21	-	小石英長石粒少, 灰褐色 (WY R 7 6)	灰褐色 (WY R 6 4)	灰褐色 (WY R 7 6)	灰褐色 (WY R 7 6)	6.7	7.0	5.2	5.5	5.5	5.5	円形底小穿孔
22	SD 01	小石英長石粒少, 灰褐色 (WY R 7 3)	灰褐色 (WY R 6 4)	灰褐色 (WY R 7 3)	灰褐色 (WY R 7 3)	6.7	7.0	5.2	5.5	5.5	5.5	円形底小穿孔
23	SD 01	小石英長石粒少, 灰褐色 (WY R 7 3)	灰褐色 (WY R 6 4)	灰褐色 (WY R 7 3)	灰褐色 (WY R 7 3)	6.7	7.0	5.2	5.5	5.5	5.5	円形底小穿孔
24	SD 01	小石英長石粒少, 灰褐色 (WY R 7 3)	灰褐色 (WY R 6 4)	灰褐色 (WY R 7 3)	灰褐色 (WY R 7 3)	6.7	7.0	5.2	5.5	5.5	5.5	円形底小穿孔
25	SD 01	小石英長石粒少, 灰褐色 (WY R 7 3)	灰褐色 (WY R 6 4)	灰褐色 (WY R 7 3)	灰褐色 (WY R 7 3)	6.7	7.0	5.2	5.5	5.5	5.5	円形底小穿孔
26	SD 01	小石英長石粒少, 灰褐色 (WY R 7 3)	灰褐色 (WY R 6 4)	灰褐色 (WY R 7 3)	灰褐色 (WY R 7 3)	6.7	7.0	5.2	5.5	5.5	5.5	円形底小穿孔
27	SD 01	小石英長石粒少, 灰褐色 (WY R 7 3)	灰褐色 (WY R 6 4)	灰褐色 (WY R 7 3)	灰褐色 (WY R 7 3)	6.7	7.0	5.2	5.5	5.5	5.5	円形底小穿孔
28	SD 01	小石英長石粒少, 灰褐色 (WY R 7 3)	灰褐色 (WY R 6 4)	灰褐色 (WY R 7 3)	灰褐色 (WY R 7 3)	6.7	7.0	5.2	5.5	5.5	5.5	円形底小穿孔
29	- SD 02	小石英長石粒少, 灰褐色 (WY R 8 2)	灰褐色 (WY R 8 1)	灰褐色 (WY R 8 2)	灰褐色 (WY R 8 1)	6.7	7.0	5.2	5.5	5.5	5.5	円形底小穿孔

中東遺跡 鉄器觀察表

編番号	捲頭 固版	遺物名	長 (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	備考
57	14	12	ST 01 (厚軸扁平内部)	約	6.8	12 完存
58	14	12	ST 01 (厚軸扁平内部)	約	10	13 先端を欠損
59	14	12	ST 01 (厚軸扁平内部)	約	12	12 先端を欠損
60	14	12	ST 01 (厚軸扁平内部)	約?	12	8 頭部? を欠損, 本質が遺存する
61	14	12	ST 01 (厚軸扁平内部)	約	43以上	4 頭部? を欠損, 本質が遺存する
62	14	12	ST 01 (厚軸扁平内部)	約	58以上	5 5 頭部? を欠損, 本質が遺存する
63	14	12	ST 01 (厚軸扁平内部)	刀	10	10 5 頭部? を欠損, 本質が遺存する
64	14	12	ST 01 (小環附)	約	45	10 先端を欠損
65	14	12	ST 01 (小環附)	約	51以上	7 10 先端を欠損
66	14	12	ST 01 (小環附)	約	65	10 10 完存
67	14	12	ST 01 (小環附)	約	105以上	8 7 頭部? を欠損, 長頭張り

図 版

図版1



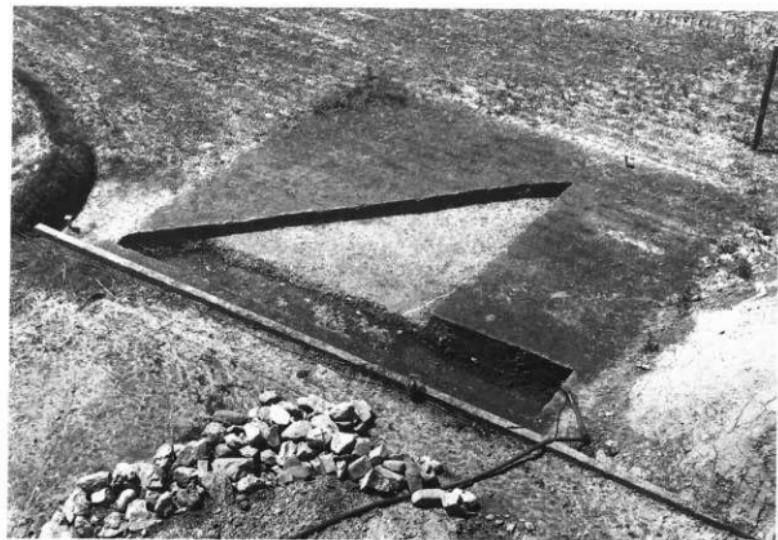
調査区全景（南から）



I区全景（東から）



II区全景（南東から）



II区トレンチ全景（南東から）

図版 3



S T01五輪塔出土状況（南東から）



表土除去後の S T01（北から）



表土除去後の S T01 (東から)



小砾層除去後の S T01 (東から)

図版 5



S T 01石組検出状況（北から）



S T 01石組内の遺物出土状況（南から）



S T 01完掘状況（北から）

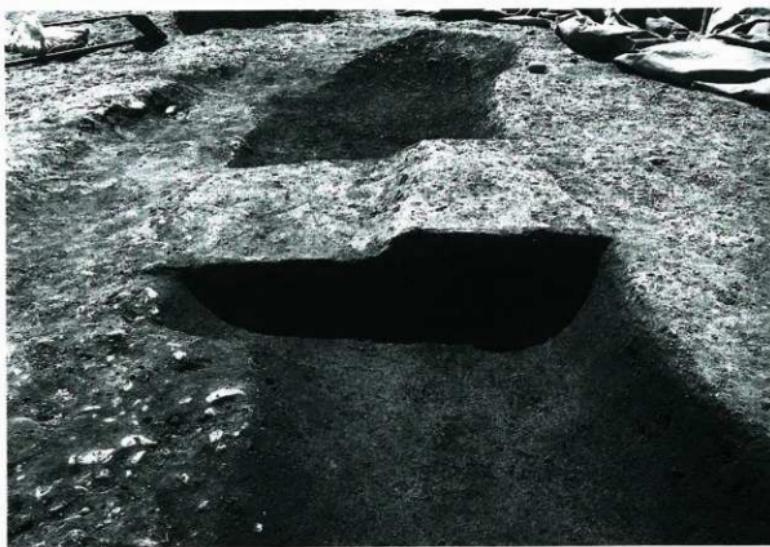


S T 01完掘状況（南から）

図版 7



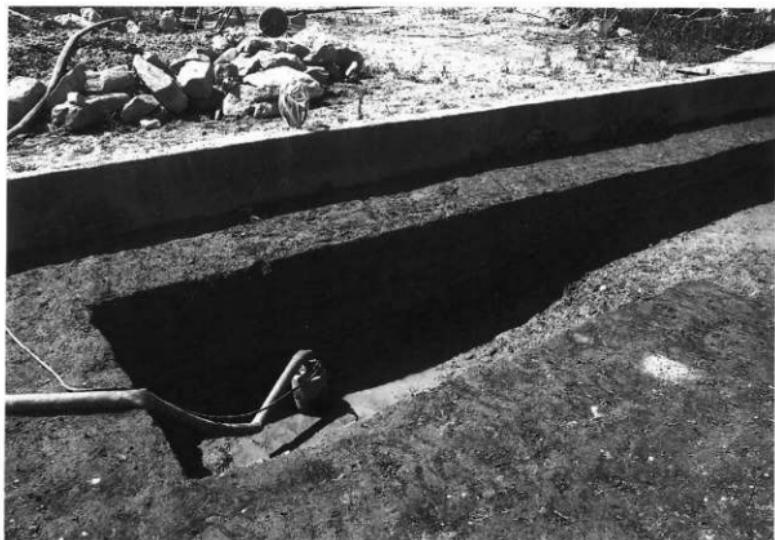
S T01完掘状況（西から）



S D01土層断面（東から）



S R 01 土層断面（東から）

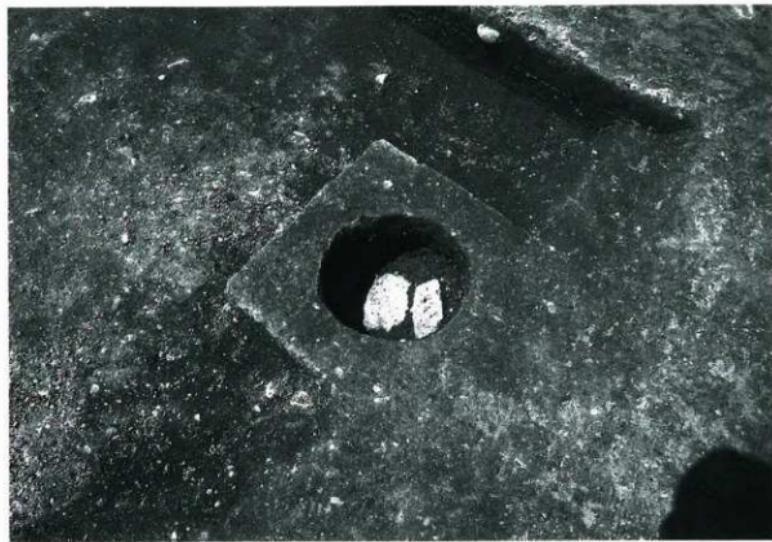


II区 S R 01 土層断面（北東から）

図版 9



S K03土層断面（東から）



S P01完掘状況（南東から）

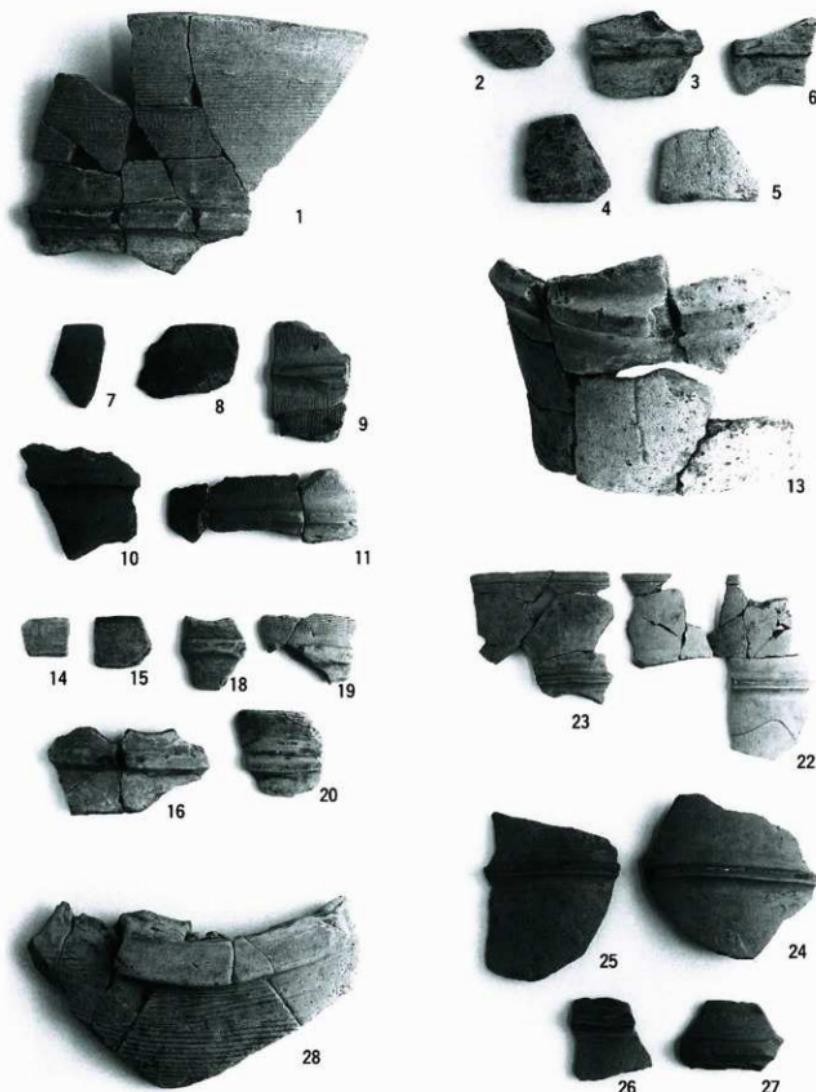


S T 02遺物出土状況（南東から）



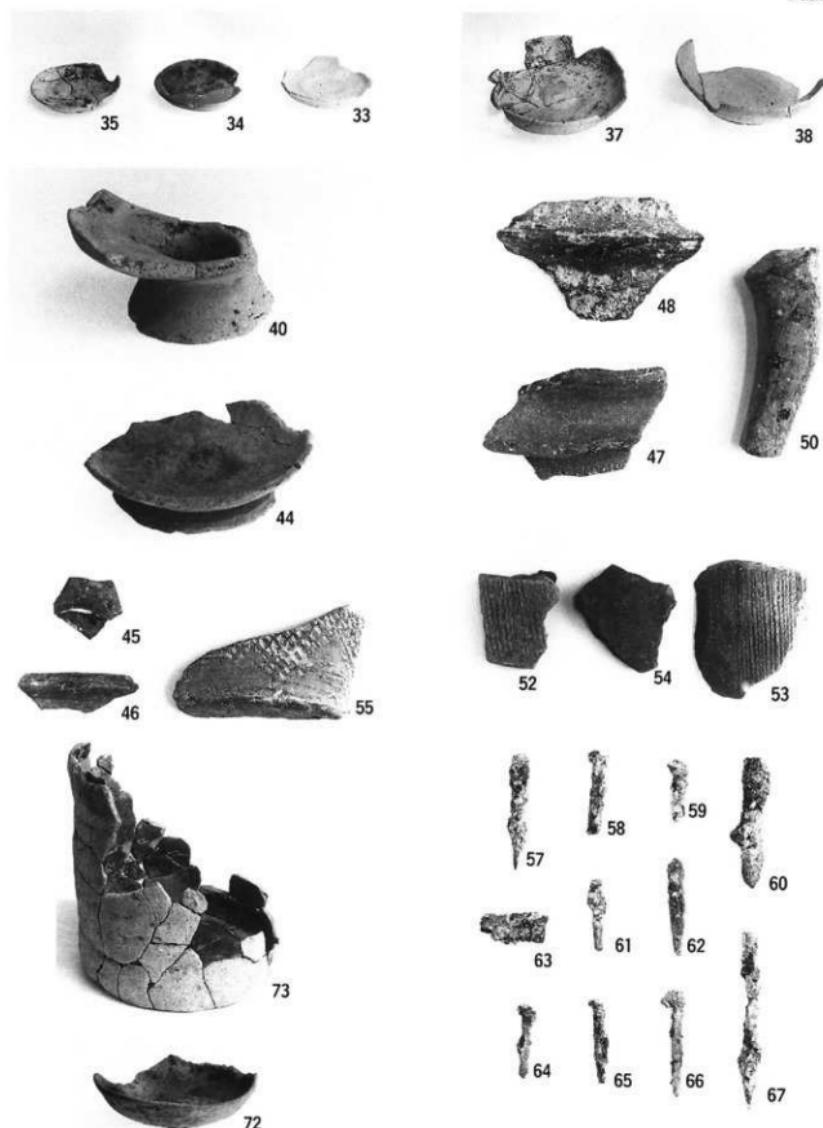
盛土山古墳遠景（北西から）

図版11



中東遺跡 出土遺物①

図版12



中東遺跡 出土遺物②

報告書抄録

ふりがな	なかひがしいせき						
書名	中東遺跡						
副書名							
卷次							
シリーズ名	県道多度津丸亀線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告						
シリーズ番号							
編著者名	宮崎哲治						
編集機関	財団法人香川県埋蔵文化財調査センター						
所在地	〒762-0024 香川県坂出市府中町南谷5001-4 電話：0877 48-2191（代表）						
発行機関名	香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター						
発行年月日	西暦 2003年3月31日						
総頁数	目次等	本文	観察表	図版	挿図枚数	写真枚数	
45頁	10頁	21頁	2頁	12頁	20枚	38枚	
所取遺跡名	所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	
中東遺跡	香川県仲多度郡多度津町奥白方字中東	37404	00004	34度14分45秒	133度43分23秒 ～ 19990701 19990831	640	県道多度津丸亀線建設事業
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
中東遺跡	集落跡	古墳時代中期	溝状遺構	円筒埴輪	方墳の周溝跡		
		中世	墓（塚）・溝状遺構・柱穴・土坑・自然河川	須恵器・土師器・瓦・鉄釘			

県道多度津丸亀線建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

中東遺跡

平成15年3月 発行

編集 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
〒762-0024 香川県坂出市府中町南谷5001-4
電話 (0877) 48-2191 (代表)
発行 香川県教育委員会
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
印刷 株成光社